

抑うつ傾向が虚記憶に及ぼす影響

237B007 山村 祥太郎

問題

虚記憶は、実際に経験していないのにも関わらず、あたかも経験したかのように、もしくは経験していても誤った形の記憶として情報を保持してしまう記憶である (Loftus, 1997)。Bartlett (1932) の研究では、参加者に絵画や文章を記録させ、覚えた記憶をすぐに想起させず、時間経過によって記録させた内容がどのように変化するかを調べた。結果として、絵画や文章は、白人文化に馴染みのないものは馴染みのあるものに変えて再生され、全体に文の長さも短くなることを見いだした。このことから Bartlett (1932) は、記録・保持・再生の各段階で、記憶した物語の内容を自文化の解釈枠組み (スキーマ) に同化させるような過程が強力に作用した結果、記憶内容が変容したと考えた。

本研究では、抑うつと記憶の関連性について検討する。抑うつとは、ストレス、学業や仕事での失敗などの環境の変化、心配症や凝り性などの性格などによって起こる状態である。我々は、嫌なことがあっても、嫌なことがあったといった事実は覚えているが、「いつ」「どこで」どのようなことがあって嫌だったといった具体的な出来事を覚えていないことがある。杉山他 (2015) は、このような具体性の乏しいネガティブな記憶想起の過剰といった記憶機能に対しても抑うつが影響を及ぼすことがあることを見出し、抑うつは理解力や判断力の低下だけでなく、認知機能の低下や感情処理の困難、情報処理の効率性の低下といった心的事象の基盤的処理能力の低下をもたらしていることを示唆している。また、松本・望月 (2013) の研究においても、記憶の中の情報は常に正しいとは限らず、変容することが知られている。

本研究では、抑うつ傾向が虚記憶に及ぼす影響について検討を行う。仮説として、抑うつ傾向の強い者ほど、ネガティブ語を想起しやすい状況において、虚記憶が形成されやすい傾向を示すのではないかと予測される。

方法

参加者 大学生 50 名が参加した (男性 17 名, 女性 30 名, 無回答 3 名; 平均年齢 18.28 歳)。

実験材料 質問紙として、島他 (1985) によって作成された the Center for Epidemiologic Studies Depression

Scale (以下, CES-D と表記) の日本語版を使用した。この質問紙は、心の状態について尋ねる 20 項目について、この 1 週間で全くないか、あったとしても 1 日も続かない場合は「A」、週のうち 1~2 日なら「B」、週のうち 3~4 日なら「C」、週のうち 5 日以上なら「D」、というように、4 件法で回答を求めるものであった。

虚記憶を調べる刺激としては、熊 (2024) の実験で使用された単語リストを使用した。このリストは、16 項目 (学習時に提示されないルアー語 1 語を含む) で構成されているネガティブ語・ニュートラル語各 4 リスト、計 8 リストで構成されていた。

手続き 実験では、最初に CES-D に回答してもらい、その後、虚記憶を調べる実験を行った。

学習段階では、参加者に対し、15 単語を含む 8 リストをランダムに提示した。各リストでは、最初に 500ms 間「Start!」を提示し、リストの提示開始を示した。その後、500 ms の注視点「+」に続いて、単語を 1500ms 提示した。単語間の提示間隔は 500ms であった。

再認課題では、各リストにつき、未学習ルアー項目 (1 単語)、未学習統制ルアー項目 (他のリストのルアー 1 単語)、学習項目 (各リストの 1, 8, 10 番目の 3 単語)、未学習無関係統制項目 (ルアー項目も統制ルアー項目も関係ない 3 単語)、合計 8 項目をランダム順に提示した。参加者は、提示された単語について、学習時に見た単語だったかを判断し、「1=まちがいにない」、「2=たぶん見ていない」、「3=たぶん見た」、「4=まちがいにない見た」の 4 件法で回答した。

倫理的配慮 本研究は、比治山大学研究倫理委員会による倫理審査を受けて承認された (申請番号 2315)。

結果

各感情語リストのルアー項目と学習項目に対する 4 (まちがいにない見た) と 3 (たぶん見た) の平均反応率は Table 1 に示したような結果となった。そこで、参加者を CES-D 得点 16 点以上の高群 (28 名)、それ未満の低群 (22 名) に分け、虚記憶形成の指標となるルアー語に対して 4 (まちがいにない見た) と答えた反応率 (Table 2) と、通常の記憶形成の指標となる学習語に対して 4 (まちがいにない見た) と答えた反応率 (Table 3) に分けて分析を行った。

ルアー語に対して 4 (まちがいにない見た) と答えた

反応率 (Table 2) について、抑うつ傾向群 (高群・低群) ×感情語リストの種類 (ニュートラル・ネガティブ) の2要因分散分析を適用した結果、群の主効果のみが有意で ($F(1,48)=4.15, p=.047, \eta^2=.08$), 抑うつ低群は高群よりも反応率が高かった。

学習語に対して4と答えた反応率 (Table 3) についても同様の分散分析を適用したが、こちらは有意な主効果も交互作用も認められなかった。

Table 1 各感情語リストのルアー・学習項目に対する4 (まちがいにく見た) と3 (たぶん見た) の反応率

	学習項目		ルアー項目	
	4 (まちがいにく見た)	3 (たぶん見た)	4 (まちがいにく見た)	3 (たぶん見た)
ニュートラル語	.74	.05	.68	.10
ネガティブ語	.73	.07	.69	.11

Table 2 抑うつ高群・低群の各感情語ルアー項目に対する反応4 (まちがいにく見た) の割合

	低群	高群
ニュートラル語	.76	.62
ネガティブ語	.77	.63

Table 3 抑うつ高群・低群の各感情語学習項目に対する反応4 (まちがいにく見た) の割合

	低群	高群
ニュートラル語	.73	.74
ネガティブ語	.73	.73

考察

本研究の目的は、抑うつが及ぼす虚記憶への影響について検討を行うことであった。仮説として、抑うつ傾向の強い者ほど、ネガティブ語を想起しやすい状況において、虚記憶が形成されやすい傾向を示すと予測した。実験の結果、4 (まちがいにく見た) について、抑うつ低群の方が高群よりも虚記憶が形成されやすい傾向があった。そのため、抑うつ傾向の強い者ほど、ネガティブ語を想起しやすい状況において、虚記憶が形成されやすい傾向を示すといった仮説は支持されなかった。

抑うつ高群の方が、虚記憶が形成されにくい傾向があったのは、彼らもつ性格や行動特性が影響しているのかもしれない。伊藤他 (2005) は、抑うつ状態になりやすい人の特徴として、「まじめ」や「几帳面」な性格に加え、評価やミスを過度に気にするといった「完璧主義」が関係していることを報告している。このことから、本実験においても、抑うつ傾向の高い人は、

「まじめ」や「几帳面」といった性格や、課題に対してミスをすることなく完璧に取り組もうとする「完璧主義」によって、視覚提示された単語を覚えようと頭の中で反すうしていたのではないかと考えられる。

また、人は自分自身を正確に知ることは難しく過信してしまう傾向 (優越の錯覚) があるが、Yamada et al. (2013) は、抑うつ程度が高い人ほど、この優越の錯覚が弱いことを見出している。気分が沈みがちな状態では、人は現実的に自分自身をとらえてしまう傾向があり (抑うつ現実主義)、それが、うつ病などの精神疾患における「やる気障害」をもたらす重要な手がかりとなると考えられている。本研究においては、抑うつが高い人ほど、実験操作によって形成された虚記憶に対して「まちがいにく見た」とは反応しない傾向がみられたが、このことは、抑うつ者が記憶形成においても同様な現実主義的傾向をもつことを示唆するものと言えるのではないだろうか。

今後、虚記憶の形成メカニズムと抑うつに関連性についてはさらなる研究が必要であろう。

引用文献

- Bartlett, F.C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. Cambridge University Press.
- 伊藤 拓・竹中 晃二・上里 一郎 (2005). 抑うつ心理的要因の共通要素完全主義、執着性格、非機能的態度とうつ状態の関連性におけるネガティブな反すうの位置づけ 関西大学心理学研究, 53, 162-171.
- Loftus, E. F. (1997). Creating false memories. *Scientific American*, 277(3), 70-75.
- 松本 昇・望月 聡 (2013). 抑うつによる自伝的記憶の具体性の減少 — アナログ研究のための教示法の検討 — 感情心理学研究, 21, 11-18.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- 杉山 崇・越智 啓太・丹藤 克也 (2015). 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション 北大路書房.
- Yamada, M., Uddin, L. Q., Takahashi, H., & Suhara, T. (2013). Superiority illusion arises from resting-state brain networks modulated by dopamine. *The Proceedings of the National Academy of Sciences*, 110, 4363-4367. <https://doi.org/10.1073/pnas.1221681110>
- 熊 莉 (2024). 色環境によって生じた感情が感情虚記憶に及ぼす影響 県立広島大学大学院修士論文